

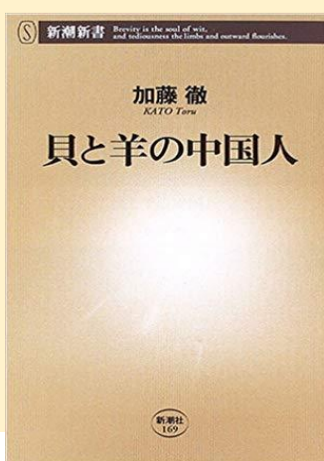
商学部

准教授 池部 亮

中国の深層や本質を知る上で多くの示唆を得ることができる良書。簡便な表現で分かりやすく、時に日本人と比較しながら「中国人とは」をテンポよく解説している。漢字で「貝」が付くのは、財、貨、賭、買などであり、有形の財貨を好んだ古代中国の殷の時代。そして、「羊」が付く、義、美、善、養など、一神教的で無形の主義を重んじた周の時代。前者を貝の文化、後者を羊の文化と呼び、現代に続く中国人の思考を読み解いていく。

流浪のノウハウでは、大陸的な広大な面積を縦横無尽に移動する民としての中国人のたくましさや垣間見える。思考についても、「お茶が入りました」と言える日本語に対して、中国語ではお茶は勝手に入らないので「私がお茶を入れました」としかならないことを紹介。一方で中国語では「彼は嬉しい」と言えたり、遠く離れた地で暮らす我が子を「この子」と言う中国語など、豊富な事例で読者を引きつける。

人口から見た中国史やヒーローと社会階級、地政学から見た中国、中国社会の多様性など、次から次へとこれまで疑問に思っていたことが見事に解かれていく。読後には単一的でステレオタイプの中国観を捨て、多面的で複眼的な中国観を改めて備えることができる。多様で異質な文化と出会い、洞察する大切さを教えてくれる必読書



加藤徹(2006)『貝と羊の中国人』新潮社

本 館: K/302.22/Ka86 701654790
Knowledge Base: 302.22/Ka86 701655243

